

先王朝時代の儀礼祭祀の痕跡か？ —エジプト、ヒエラコンポリス遺跡の発掘調査(2020 年)—

馬場 匡浩 早稲田大学エジプト学研究所客員主任研究員

Revealing the Ritual Activities at the Predynastic Elite Cemetery: Excavation at Hierakonpolis, 2020 Season

BABA, Masahiro Visiting Researcher, Institute of Egyptology, Waseda University

馬場
匡浩

1. はじめに

古代エジプトの王朝時代は、紀元前 3000 年頃に始まる。それ以前を先王朝時代と呼び、特に 4 千年紀後半は、王朝成立に向けて社会が大きく変動する重要な時期にあたる。この時期で最大規模を誇る遺跡が、ヒエラコンポリスである。エジプトの南部、ルクソールとアスワンのほぼ中間に位置するこの遺跡は、当時の政治、経済、信仰の中心地の一つと考えられている。先王朝時代の遺構は主に、低位砂漠の縁辺部と涸れ谷内に分布する(図 1)。遺跡全体の調査権は、オックスフォード大学アシュモレアン博物館(隊長 Renee Friedman)が取得し、筆者は分担調査として涸れ谷内の HK11C 地区にてこれまで発掘を進めてきた。当地区での調査の目的は、集落址の情報を得るためである。先王朝時代に限らず、エジプトの発掘は墓地遺跡に偏重している。それは、古代においても集落はナイル沖積地に営まれたため、発見・発掘が困難であり、おのずと低位砂漠の墓地遺跡が調査の対象となってきた。しかし、王朝文化の成立過程といういわば先王朝時代の一つの命題を理解するには、埋葬資料のみならず、生業活動など集落址資料も必要となる。HK11C 地区は 70 年代に試掘調査が行われ、先王朝時代の集落が地表下に眠っていることが判明していた。2004 年、上記の目的のもと、当地区の発掘調査が開始された(Baba and Friedman 2016)。結果、Naqada II 期のビール醸造(Farag et al. 2019)や食品加工の生産施設が発見された(図 2)。ここは単なる集落址ではないことが判明したのである。遺構の規模からも想定される生産量・専業度は高く、職業の分化と専業化が、王朝成立直前の時期に大きく発展したことが窺える。特に注目されたのが、食品加工施設で大量に検出された動

物遺存体の分析成果である(Baba et al. 2017)。家畜のウシと大型淡水魚のナイル・パーチがその大部分を占めるが、部位の出土頻度を調べると、頭骨の頻度が高く、頸椎など胴部の骨が低い。食べる部位が少ないのである。つまり、ウシやナイル・パーチはここで解体・加工され、どこか別の場所の消費地に供給されたと考えられる。その場所は、立地環境から考えて、HK11C 地区の対岸にある HK6 エリート墓地がまずは候補としてあげられる(図 1)。2017 年に実施したエリート墓地北端での発掘調査で、人工的なマウンドの一部とその周辺で特殊な遺物が発見された。ここが儀礼祭祀に関連する場所である可能性が得られたため、2020 年にマウンドでの発掘を継続した。以下はその概要である。

2. 発掘成果

HK6 エリート墓地は、涸れ谷内の微高地上に南北に広がって造営されている。その北端にはレンガで裏打ちされた Naqada IIIA2 期の 2 つの墓(Tombs 11 and 111)が存在する。これら墓の北側は緩やかな傾斜面となっていたが、2017 年の発掘で人工的なマウンドの一部が検出された(Friedman 2018)。特筆すべきは、マウンド上面で発見された数多くの大型の土器片であり、接合すると土製カバ像であることがわかった。全長 1.5~2 m ほどであり、生後半年ほどの子カバに相当する大きさである。胎土は粗製ナイルシルトで、切り藁と砂を多く含む。脚部は別に成形して取り付けられている。この他、特異な遺物として土製人形の断片なども発見されている。

そこで 2020 年 2 月、墓地北端の機能を理解するべく、マウンド全体を露呈させることを目標に発掘を開始した。マウンドの斜面をカバーできるように、およ

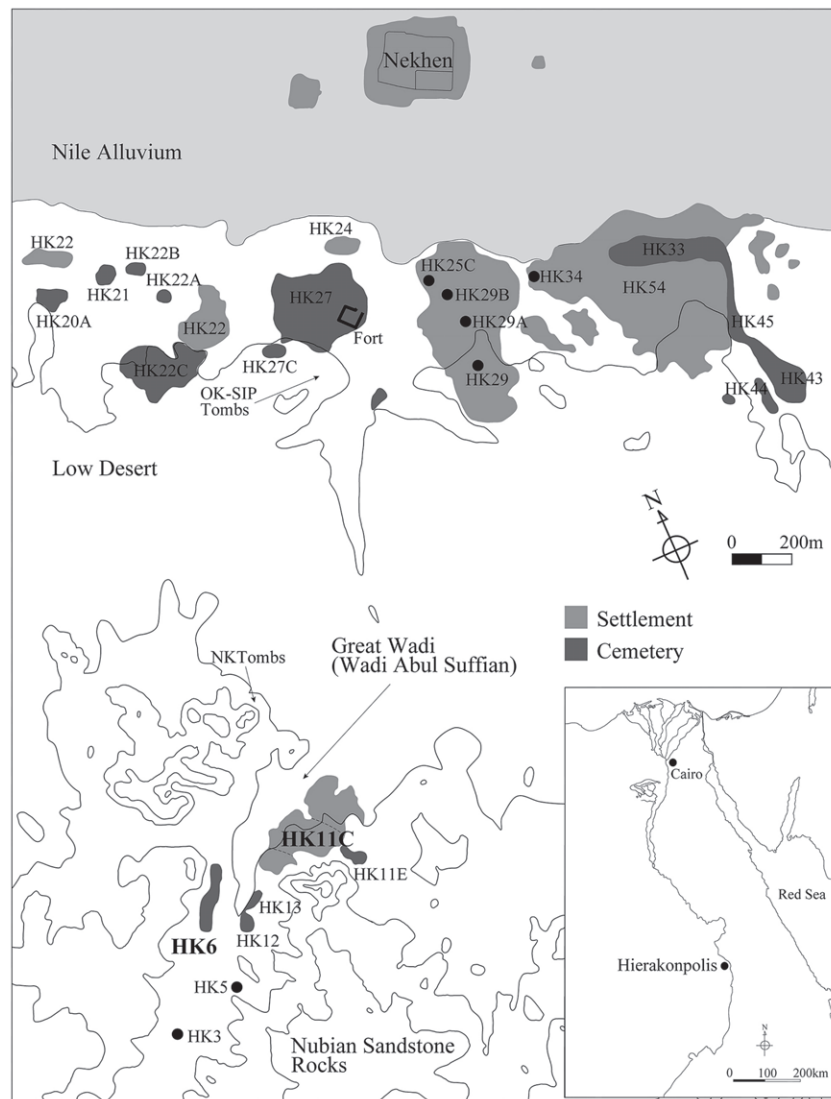


図1 ヒエラコンポリス遺跡全体図



図2 HK11C 食品加工施設(右奥はビール醸造址)

そ7×7mの調査区を設定した(図3)。表層の砂層を剥がすと、礫を含む赤褐色の堆積が広がる。この層にはレンガ、マット、木材などの破片が含まれることから、Naqada IIIA2期の墓を造築した際の排土と考え

られる。残存状況の良いレンガ片は幅12cm厚さ5cmであり、これはTomb 111で用いられたレンガの規格と一致する。この赤褐色層の直下で、マウンドの硬化面が検出された(図4)。マウンドの上面と斜面は、平滑に砂と小石が締め固められている。この平滑な硬化面は、二層確認されることから、少なくとも改変が一度行われたようである。マウンドの硬化面には、上面に大型の木杭(径20cm程)が2つ、斜面にも小型の木杭が幾つも検出された。また、大小様々な窪みも確認され、上面に穿たれた最も大きな窪み内には木片が残っていた。当遺跡では、木杭にマッドなどを貼り付けた柵が一般的であり、このマウンドにもかつて柵で囲まれた構造物があったと考えられる。

小型木杭が多く検出された付近にて、狭い範囲に土器片と礫が集中して検出された(Feature 1)。含まれる土器のアッセンブリッジが特徴的であり、赤色磨研

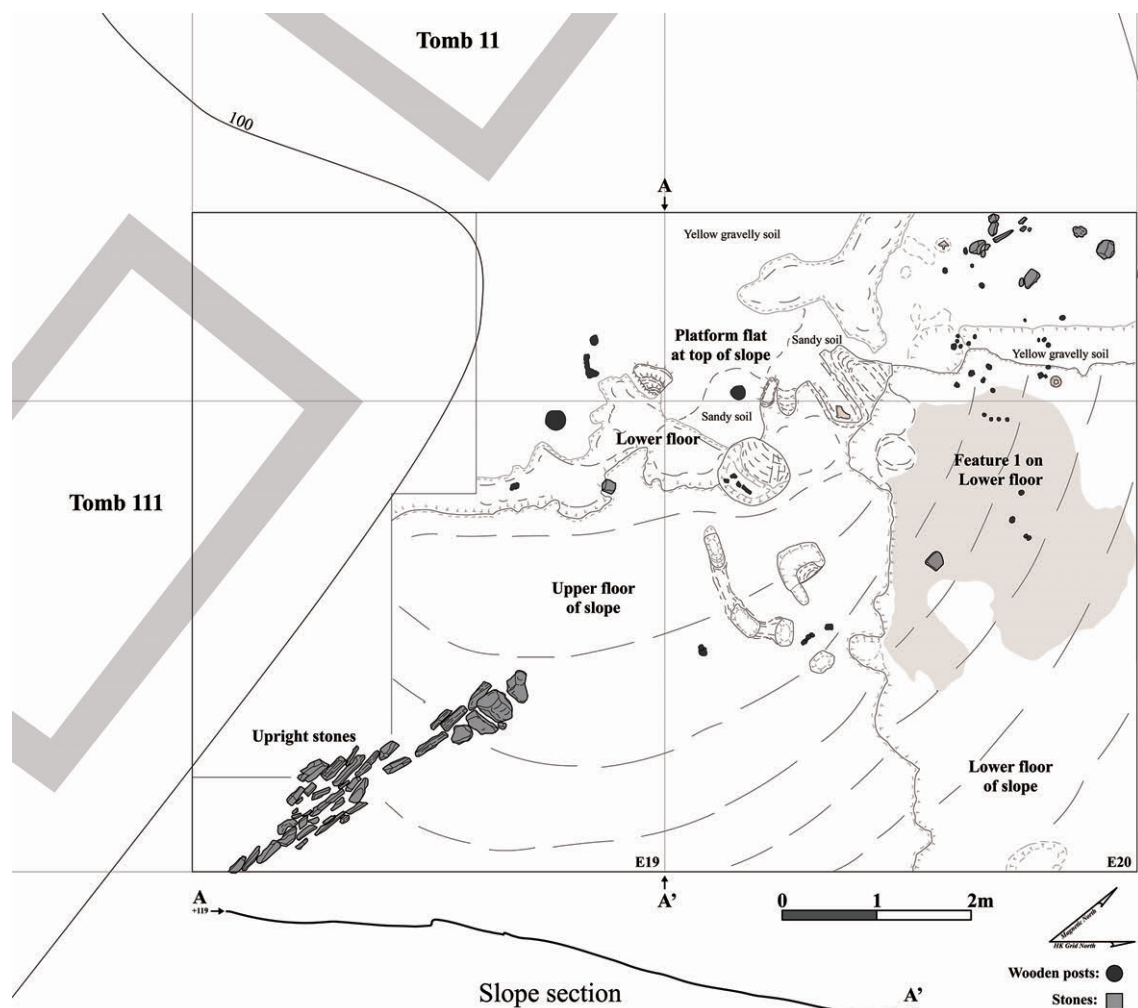


図3 2020年発掘平面図



図4 マウンド遺構(東より)

の小型ボウル(径11 cm程)と黒頂磨研の小型ピーカー(径8 cm程)が全体の80%を占める。これらの器形はNaqada II期に比定される。小型ボウルでは、内面に煤付着や被熱痕が観察される例もあり、香炉やランプとして利用されたと考えられる。小型ピーカーにも口縁部や底部に使用の欠損がみられ、器形からも飲

用の容器として使われたのであろう。

Feature 1の近くでは、他にも特筆すべき遺物が発見された。まずは、完形のメイスヘッドである。エリート墓で2例目の完形となる。閃緑岩製で、直径9 cmである。この形状のメイスヘッドはNaqada I-IIAB期に特徴的であり、スロープの活動時期を推定できる資料といえる。そしてもう一つが、土製人形である(図5)。5点の破片が発見された。鳥のような頭部を持つ人型像、指まで詳細に表現された右腕、先端が穿孔された腕(?)、先端の尖った腕(もしくは動物角)、そして先端の曲がった腕(もしくは動物頭部)である。穿孔された人形片は、かつてのTomb 11の発掘で同じものが発見されている(Adams 2000: cat. no. 225, fig. 16.)。また、指まで表現された腕や先端の曲がった腕は、ボストン美術館に保管されるNaqada II期の人形像にその類例を求めることができる(e.g. Accession No. 04.1802)。

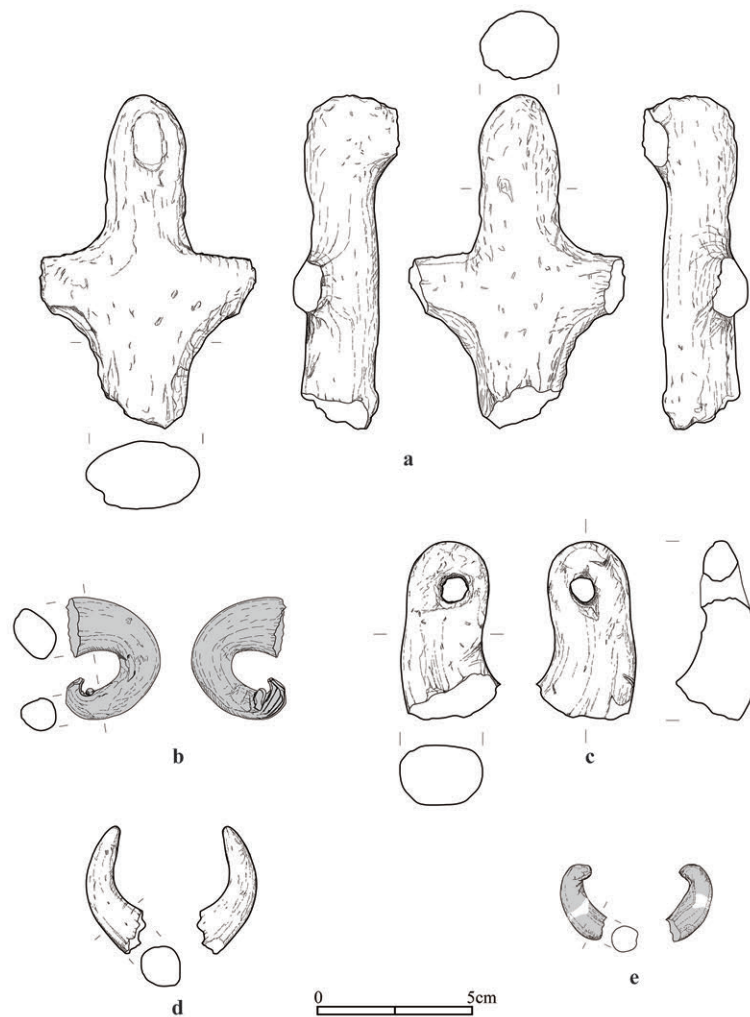


図5 土製人形片

3. おわりに

今回の調査では、残念ながら HK11C 地区の生産品が消費されたことを明確に示す遺存体は検出されなかった。しかし、エリート墓地内で、埋葬ではなく儀礼祭祀の痕跡と考えられる特殊な遺構と遺物を発見することができた。マウンド南側では砂岩を立て並べた壁体遺構が検出され、これは墓地の範囲を定める境界線、または、北端に位置することからも墓地の入口を示す壁体であったと考えられる。どちらにせよ、墓地への玄関口として重要かつ神聖なこの場所には、Naqada III 期の墓が築かれる以前の Naqada II 期にマウンドが構築され、そこに土製カバ像が据えられた。おそらく祠堂のような建物も伴っていたであろう。カバは獰猛な動物であることから畏怖の対象であり、墓地を守護する意味もあったかもしれない。そこで、人形像や土器を用いた供物奉納を伴う儀礼祭祀が行われたのであろう。

本調査は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(C)『古代エジプト国家形成期における儀礼と権力に関する考古学研究』(代表：馬場匡浩、課題番号：19K01100)の交付を受けて実施した。

参考文献

- ・ Adams, B. 2000 *Excavations in the Locality 6 Cemetery at Hierakonpolis 1979-1985*. BAR International Series 903, Oxford.
- ・ Baba, M. and R. F. Friedman 2016 Recent excavations at HK11C, Hierakonpolis. In M. D. Adams (ed.), *Egypt at its Origin 4*, 179-205. Leuven, Peeters.
- ・ Baba, M., W. Van Neer and B. De Cupere 2017 Industrial food production activities during the Naqada II period at HK11C, Hierakonpolis. In B. Midant-Reynes and Y. Tristant (eds.), *Egypt at Its Origins 5*, 3-34. Leuven, Peeters.
- ・ Farag, M. A., M. M. Elmassry, M. Baba and R. Friedman 2019 Revealing the constituents of Egypt's oldest beer using infrared and mass spectrometry. *Scientific Reports* 9(1) 16199.
- ・ Friedman, R. 2018 The Hippo Next Door: Further Discoveries Around Tomb 111. *Nekhen News* 30: 13-14.